NEW
集英社は8月28日、株主総会を行い、第71期（Ｈ23.6.1～同24.5.31）決算を発表した。それによると、売上高は1260億9400万円（前年比
4.4％減）、営業利益25億6300万円（同63.1％減）、経常利益69億1500万円（同39.4％減）、当期純利益37億5100万円（同
32.4％減）で、前期から大幅な減収減益となった。最大の原因は、雑誌分野のコミックスが前期比で11.7％も落ち込んだこと。
ただし、「MORE」「BAILA」「MAQUIA」「eclat」などの女性誌は好調で、広告収入も同1.1％増と堅調だった。

集英社に先立つ8月24日、光文社も株主総会を行い、第68期決算が確定した。それによると、売上高は246億3000万円（前年比5.6％増）、営業利益は15億6300万円（同1.0％増）、当期純利益は11億1800万円（同1.9％増）と、2期連続で増収増益となった。売上高の内訳を見ると、「販売」が145億7200万円（同6.7％増）、「広告」が79億9900万円（同1.1％増）、「その他」（物販・版権収入など）が9億9300万円（同59.4％増）といずれもアップしている。ただし、「不動産等」10億6600万円（同6.4％減）はダウン。集英社と同じく、「ＶＥＲＹ」「ＳＴＯＲＹ」「ＨＥＲＳ」など女性誌が好調だったことが、業績を押し上げた。

両社とも女性誌が好調。これで広告収入がわずかでも前期比増となっているのが、共通している。ただし、昨年前半期は東日本大震災の影響があっただけに、この程度の回復は当たり前。集英社の漫画が大幅に落ち込んだことを考えると、出版界の今後の見通しは暗い。